



社業の飛躍的發展

決戦下職員的心得

社長 古野伊之助

昭和十八年度豫算
今朝は新會計年度の豫算が決定したのを機会に、社内的情勢一般について一應の説明をして、諸君の心構へに資したいと思ふ。

先月二十二日の同盟理事會で決定した重要案件が二つある。その一つは四月一日に始まり翌年三月末に終る會計年度の豫算決定であり、他の一つは常務理事二名の選任である。前者即ち昭和十八年度豫算の決定は、これを通じて過去七年四月月にわたる我が同盟建設の過程を偲ぶもつとも有力な資料である。

また新常務二名の選定は同盟建設の將來の方向を明示するものである。新しい豫算の總額は二千三百萬圓、そのうち國內、支那を含んだ一般豫算が千七百萬圓、南方地域にわたる豫算が六百萬圓、合計二千三百萬圓の龐大な豫算である。これは同盟結成當時、即ち昭和十一年四月現在の豫算に比してみると約七倍の増大である。その當時の豫算は三百萬圓程度のものであつたのである。

社業の飛躍的發展

また當時同盟の仕事に携つてゐる

人員の總数は約一千二百名であつた。最近の豫算編成に際しては計數を當ててみると、南方に急激な人員の増加をみてゐる。この間まは三千名といひ、四千名といつてゐた同盟の同志總数は將に五千名に達しようといふ状態である。即ち人員の總数は同盟結成の昭和十一年四月當時に比して約四倍に上つてゐる。

同盟の仕事の根幹をなす電信、電話の取扱數量は非常な増加を來し、殊に専用電話の延長キロ數は、その當時二千キロであつたが、今日は六千數百キロに上つてゐる。即ち三倍強の増加である。海外電報取扱數量は當時一日平均三千語程度であつたが、今日は六萬語を扱つてゐる。實に二十倍の増大をみてゐるといふ状態である。

かゝることとして同盟結成の昭和十一年から今日にいたる間に、五倍、十倍とあらゆる分野にわたつての社業の飛躍的發展をみてゐるわけなのである。

またさらに遡つて、わが國が今から三十年の昔、第一次世界大戰勃發に先立つて、わが國朝野の識者が初めて日本に對外的活動を目標とする通信社の創立を思ひ立つ

世界の輿論を導く

たその當時、僅に十萬圓の資金を集めて十數名の人員を擁してこの仕事に着手した。當時の國情ならびに通信社の實情を思ひ浮べてみると實に今昔の感に堪へないものがある。

號七十六第
月四年八十和昭
行發日十・回一月毎
錢五部一價定
錢十六(共稅)分年一
一才 田杉 編發行發
人印刷
國公谷比日區町市京東
社信通盟同 所行發

その當時の國力は渺たる東亞の一隅に位置する小帝國にすぎないものであつた。これを背景とする通信社のごときもまた大英帝國の從屬的地位を辛うじて支えてゐるといふにすぎないものでしかなかつた。

今日この世界の歴史を轉換する大戰爭を戦ひつゝ、わが皇國日本は全人類の安定勢力として、その地歩を確立しようとしてゐる。この國力を背景とするわれわれの同盟も、世界の輿論を左右し得る實力を將に確立しようとしてゐるのである。

かやうなことを思ひめぐらしてみると、この仕事を預つてゐるわれら五千の同盟同志は、いよいよその職責を通じて、われわれの果さなければならぬ任務の重大性を痛感して、擧社一致、報道報國の使命達成に衷心奉公しなければならぬといふ決意をますます強くしなければならぬと考へるのである。

本年は決戦の歳だといはれてゐる。如何なる苦難も平然として、どこまでも、實力を逞しくして、堅忍不拔の覺悟をもつて、この戦を戦ひ抜いて、はじめて日本の永遠の東亞における地位、世界に對

ける立場を確保し得るのである。對外、對内思想戦の重責を双肩に擔つて戦ふわれわれは、どこまでもそれぞれの職場に、最善の工夫と眞剣の努力をもつて臨まなければならぬと考へるのである。

職員優遇に努力

私自身としては、この國家的使命達成のために邁進する同志五千名の立場と將來をしつかり確保して、安心して同盟とともに生き、同盟とともに戦ひ、同盟とともに働いて行く人々の前途を護つて行かなければならぬと考へる。

社業を充實強化する傍ら、その財政的立場を見較べながら以上の考へを實現に移すべき最善の努力を盡してゐる覺悟である。しかも私自身の考へでは應急的措施に先立つて先づ恒久的の制度を確立する必要があるものと思ふのである。

私自身が、この社の運命を預つてゐる間に、どうかして同盟建設のため多年苦闘を重ねてくれた同志諸君の前途に對する恒久的施設を一日も早く確立したいといふ考へから健康保険、養老保険、年金などの諸制度を實現し、充分とはいへないが、社の財政の許す範囲内において一應の制度は整へた積りである。

今年はどうかして應急的措施の實現に移りたいと考へてゐるわけである。その目的を達するためには必要経費の計上も新豫算中に見積つた積りである。

兎角この大きな戦争を眼前に控へて、經濟情勢はどんどん變革して來るので、これに對應して諸君の生活を確保し、これを安定させて行くのには、獨り私自身が苦心してゐるくらゐのことでは到底追いつかないのである。全社學つて充分な協力をして戴きたいと考へる。

物資節約に協力

物價は段々騰貴する一方、物資の獲得も困難となつて來たが、もとより戦時下免れ難き當然の歸趨である。かかる障礙を二年、三年、五年と突破して行かなければならぬのである。眼の前の小さな事象に捉はれてはならぬ。諸君の手許においても、それぞれの職場を通じて充分に工夫を凝らして、眞剣な努力をすることに協力して戴きたい。

極めて卑近な問題ですが、例へば電力の節約を主張される場合に不要な電燈は一燈でも手許から消して貰ひたい。これは單に同盟の經費節約云々を論じてゐる問題ではない。今日は或る個人、若しくは或る會社の利害が國家と完全に結びついてゐないところははないのである。無駄な電力の浪費、これは國力の消耗を意味する。どうかその積りで電力の節約にも協力して貰ひたい。

また物品の浪費も充分警戒して戴きたいと思ふ。最近資材部の報告によると、一ヶ月五千本の鉛筆を使ふといふことである。これを諸君が少し注意して一割、二割の節約をはかることは何んでもないことだと思ふ。鉛筆もまた國家の有用なる資材の一つであるといふことを忘れてはならぬと思ふのである。

保健施設整備

次に諸君の健康保持についても社において施設を要する企畫があるならば遠慮なく提案して貰ひたい。この綜合編輯室の換氣装置のごときも極く早い機会に整備する積りである。胸部疾患の撲滅のため取敢ず今月中に職員全體の検診を行ひ、靜養を要するものに對しては急速に手當を加へるやうにしたい。今年中には社員全體の應急共同施設などを整備する積りである。

諸君においても、同盟一族へをもつて私のこの心持に御協力を願ひたい。(昭和十八年四月八日第十五回大詔奉戴日訓示)

古野社長

中京視察

古野社長は伊勢神宮參拜の歸途三月十七日名古屋に立寄り同夜五時半から名古屋觀光ホテルにおいて雪澤知事、加藤聯隊區司令官、瀧澤名古屋帝大總長その他軍官有力者四十餘名を招き晩餐會を催し南方視察を試み、さらに懇談

マニラ支社移轉

マニラ支社は左記に移轉した。マニラ市エスコルタ街 日本文化會館四階

第二十六回理事會議事

第二十六回我が社理事會は三月二十二日午後一時三十分より日比谷公園松本樓において開會、理事總員三十三名中二十二名および古賀常務監事出席(ほかに委任狀十名)理事會會長高石眞五郎氏議長席につき開會を宣し議事に入り次の諸件を決定した。

一、昭和十八年度收支豫算案の件
古野社長より本豫算案審議に先立ち十八年度においては從來特別會計として處理した寫眞部及び出版部關係收支を一般會計に繰入れた點及び新に南方通信特別會計を設けたことにつき諒解を求め兩豫算案を可決承認す

二、理事推挙及び常務理事二名決定の件
古野社長より常務理事二名の

空席について現業職員中最も社業に精通し且つ社務に盡瘁功績ありと認むる左記候補者二名を理事に推挙、満場異議なく決定

松本重治(海外局長)
鷹野壽(聯絡局長)

三、諸般の報告

(イ)社員新聞社異動の件
(ロ)理事異動の件
(ハ)職制改正の件
(ニ)支社局新設の件
(ホ)國通と新契約締結の件
(ヘ)社員交換制度制定の件
(ト)同盟産業報告會結成の件
(チ)社費月額並に寫眞通信費調整の件

以上各項につき出席理事一同これを諒承、午後二時三十分閉會した。

同盟講習所第九期卒業式舉行

同盟講習所第九期卒業式は三月十九日正則中學校講堂において舉行したが、卒業生氏名は左の如し

- △電信科
- 中林 正房 脇坂 久人
 - 高井 眞澄 横瀬 義雄
 - 岸田 繁 池上 多萬留
 - 伊藤 安次郎 岡野 高芳
 - 石田 勝夫 中屋 二男
 - 富樫 光春 厨川 實孝
 - 三村 又四郎 小峰 定夫
 - 中島 一 大塚 定夫
 - 土門 文治 鈴木 定平
 - 只友 良夫 野口 正夫
 - 岡部 嘉夫 久保田 久男
 - 丹羽 隆一 森 久明
 - 大越 泰治 立林 森正
 - 千葉 健司 藤岡 廣士
 - 松井 得司 岩尾 由夫
 - 堀端 輝幸
 - △速記科
 - 佐藤 好也 見瀬 敏徳

- △電送寫眞科
- 杉本 澄男 倉根 基次
 - 二宮 博 藤 沼 保
 - 石黒 喜代治 齋 藤 登
 - 小林 重次郎 齋 藤 登
 - 宮澤 惠次 古池 逸夫
 - 塚田 清
 - 優等生に對し藤岡賞を授與されたる者左の如し。
 - 脇坂 久人 高井 眞澄
 - 横瀬 義雄 岸田 繁
 - 久保田 久男 丹羽 隆一
 - 代田 三郎 二宮 博
 - 佐藤 好也 早瀬 敏徳
 - 杉本 澄男 松井 正男
 - 田口 勝昭 小石 英明
 - 近藤 伸一 島崎 喜作
 - 前田 榮三 有馬 昭忠
 - 甲田 富男 柿崎 金四郎
 - 長谷部 達夫 島田 侃
 - 皆勤賞授與者數 二十五名
 - 精勤賞同 四十七名

陽春職員鍊成譜

社員家族總出
の鍊成會
一日俱附屬園で

四月四日の新聞休日、支社總局では上海北郊の日俱附屬園で、社員家族總出の鍊成會を催した。前日來の雨もからりと晴れて絶好の運動會日和、懸念した芝生の使用も大丈夫だといふ。さあ決行だ。關心里、昆山路、克明路各住宅の家族組、老艸子路の獨身組、それに遠來の英文部自轉車隊まで加へると總勢九十名である。

午前十一時、岩本總局長司會で國民儀禮後、競技開始、二百米競走をトップに繩跳競走、親子競走、風船競走と、番組の進むにつれ興味は白熱して歡聲は場を揺がす。味は白熱して歡聲は場を揺がす。味は白熱して歡聲は場を揺がす。

この日壓巻はなんとといつても各部對抗四百米繼走だつたが遂に通信部が優勝、午後三時同盟通信社萬歳を三唱して和氣諷々裡に散會した。(寫眞は鍊成會記念撮影)

四月四日新聞休日、關門支社局は九州切つての靈山、英彦山神社に伏敵祈願のため強行登山を執行し、全社員全裸となつてみそぎを執行しようといふ計畫だけに、二日も前から物凄く人気が呼んでゐた。しかも門司港驛前集合が午前五時、非常召集も兼ね行ひ五時二十分の始發列車に乗込もうといふのである。當日は来た。ところが關門地方は生憎く風さへ加つて豪雨である。やむなく豫定を變更し

リユックの辨當が雨滴に流れ出すのもいとほはこそ、晴閣の豪雨を衝いて先づ門司側甲宗八幡宮へ向つて戦捷祈願を行ひ、更に國道トネル工事たけなはな海峽の眞上



を渡つて上關側にいたり、ここでは官幣大社赤間神宮と縣社龜山宮とに詣で、それぞれ米英撃滅の祈願をこめ、一同びしよぬれになつて日和山公園にいたり聖壽萬歳を奉唱して正午散會した。

四月とはいへわが信濃路は四邊の山々白皚々、春風未だ肌寒い。北方アリュウシヤン方面に惡戰苦闘する皇軍將兵と僚友報道戰士の身の上を偲び、健兵健民の要請に應ふべく全支局員一同は四月早朝志賀高原の山麓湯田中驛に勢揃ひした。

案内役の養田元老の騎旋で食糧自給の堅實振り先づ安心して、荒井支局長、兩角無線主任ほか全支局員と家族、高田から應援の新潟日報の霜島君を加へて總勢二十一名、紅三點も意氣高く、撃ちてし止まむと社旗を先頭に行進を始め約三十分、途中聖護國百尺大觀世音に參拜して國運の躍進、皇軍將兵の武運長久を祈願し、報道報國を誓つた。

折から降りしきる春雨に烟る山の湯の町は一入風趣を増し、夜間瀬川の溪流を挟んで水墨山水の名畫を四面に點綴したが登り坂道は雪解けと雨で相當難澁だ。休憩所塵表閣に十時到着、早速温泉に飛び込む者、春雨に濡れて象山の遺蹟を偲ぶ者、廣業寺へ詣づる者、食後は鍊成藝と福引に和氣横溢、賊聲湧き、夕刻再び出湯にひたつて身心を清め、明日の躍進を期して一同元氣に下山した。

出版部だより

- 『同盟戦時特輯』既刊及び近刊
- 1 日本的世界觀 大串 兎代夫
 - 2 新東亞とフリツピン 中屋 健次
 - 3 大東亞戰下の食糧對策と食糧營團 木村 昇
 - 4 落下傘部隊 佐藤 喜一郎
 - 5 英國の植民地統治方式 伊 東 敬
 - 6 新東亞とタイの現實 大 澤 滋
 - 7 金融新體制と銀行の動向 永 山 公 明
 - 8 新東亞と蘭印の現實 俣 野 博 夫
 - 9 中小商工業の再編成 今 村 武 雄
 - 10 獨逸の占領地統治方式 海 野 稔
 - 11 大東亞建設と國語の問題 大 久 保 正 太 郎
 - 12 國民運動と國民教育者 留 岡 清 男
 - 13 醫術と醫道 高 野 六 郎
 - 14 モンロー主義 濱 田 久 米 夫
 - 15 緊張するドイツの統後 高 瀬 太 郎
 - 16 獨ソ戰の新段階 高 須 忠 彦
 - 17 木造船 岡 田 良 一
 - 18 緊迫せる獨逸軍需工業 池 上 幹 徳
 - *15-18は四月下旬-五月中旬刊

辭 令

大阪支社長 福岡 誠一

南方總局長を命ず

大阪支社長を命ず

海外局長兼 松本 重治

南方總局長兼務を解く(四月二十五日附各通)

編輯局調査 彦坂 竹男

部月報主任

參事とす(二月二十四日附)

總務局勤務社員 三浦 良知

經濟局內經部次長を命ず(三月一日附)

大阪支社經濟部 小原磯太郎

商況主任兼通信 猿橋 進

部査閱主任

スラバヤ支局長を命ず

昭南支社勤務社員 加藤 松

スマラン支局長を命ず

勤務社員 磯部彌太郎

ダバオ支局長を命ず

編輯局勤務社員 上野 貞夫

レガスピー支局長を命ず

大阪支社内經主任 鶴太

バンドン支局長を命ず

中支總局經濟部長 神坂 鶴太

編輯局政經部次長を命ず
北支總局勤務社員 吉富 正甫
北支總局英文部次長を命ず
經濟局勤務副參事 中井 尙明
京城支社業務部長を命ず
京城支社商通主任を命ず
編輯局整理部 田中正太郎
長兼校正主任
校正主任兼務を解く
中支總局長 岩本 清
漢口支局長兼務を解く
スラバヤ支局長 秋葉 武雄
編輯局勤務を命ず(三月二十日附各通)

(以上本社回狀第二十四號發表分)
岡山支局長 松宮 覺次
南方總局總務部長を命ず
南方總局經理主任 久村 定雄
同經理主任を命ず
經濟局勤務社員 酒井 井平
同庶務主任を命ず
南方總局勤務社員 下條 徹男
同資材主任を命ず
昭南支社勤務社員 永田 君人
南方總局編輯部長を命ず
昭南支社勤務社員 依岡健一郎
同取材主任を命ず
昭南支社勤務社員 高野太一郎
同通信主任を命ず
編輯局整理部次長 荻原 榮治
同、同報主任を命ず
編輯局外信部次長 久我 豊雄
南方總局海外部長を命ず
昭南支社勤務社員 黒澤 俊雄
同情報主任を命ず
昭南支社勤務社員 柳原 麗一
同英文主任を命ず
南方總局經濟主任 秋山 操
南方總局經濟部長を命ず
聯絡局電務部長兼 吉田 松治
南方總局電務主任
南方總局電務部長を命ず
濟南支局勤務社員 岩井 和夫
同務絡主任を命ず

南方總局寫眞主任 知久 義雄
南方總局寫眞部長心得を命ず
岡山支局長を命ず
神戶支局速記主任 伊賀 徳次
福井支局長を命ず
聯絡局電務部次長 竹中 三郎
聯絡局電務部長を命ず
南支總局通信部長 松尾 信
南支總局電務部次長を命ず
南支總局勤務社員 小久保丈夫
南支總局通信部長を命ず
編輯局勤務社員 高雄 辰馬
編輯局整理部次長を命ず
經濟局庶經部次長 後藤 丙午
副參事とす
編輯局勤務を命ず
編輯局外信部次長を命ず
編輯局外信部次長を命ず
海外局勤務參事 石田 貞一
海外局情報部長を命ず
海外局情報部長 萩原 忠三
參事とす
海外局勤務を命ず(四月一日附各通)

編輯局勤務社員 久野 茂男
編輯局外信部次長を命ず
經濟局業務 松本 兼吉
部業務主任
編輯局整理部タイプ主任を命ず
(三月廿二日附各通)
神戶支局勤務社員 西向 種吉
神戶支局經濟主任を命ず(四月一日附)
大阪支社勤務社員 良本 敬
神戶支局速記主任を命ず(四月七日附)
以上本社回狀第二十八號發表分
編輯局勤務社員 大谷 正義
マカッサル支社勤務を命ず(二月二十四日附)
北支總局勤務社員 上出 正七
海外局勤務を命ず(二月二十七日附)

臺北支社同 齋藤 敏雄
中支總局勤務を命ず
中支總局同 井生 武夫
佐世保通信部駐在を命ず
熊本支局同 河口 憲三
長崎支局勤務を命ず(三月五日附各通)
中支總局同 佐藤 一雄
經濟局勤務を命ず(三月六日附)
大阪支社同 高野小次郎
聯絡局勤務を命ず(三月八日附)
關門支社同 上田 博
小倉通信部駐在を命ず(三月九日附)
大阪支社同 西辻 太一
西貢支社勤務を命ず(三月九日附)
北支總局同 村上 定一
ジャカルタ支社勤務を命ず
スラバヤ支局勤務 鈴木 啓示
社員
編輯局勤務を命ず
聯絡局勤務社員 高野太一郎
昭南支社勤務を命ず
編輯局同 藤部 茂男
マカッサル支社勤務を命ず(三月十日附各通)
編輯局同 若杉 修介
マカッサル支社勤務を命ず(三月十一日附)
編輯局同 安井 徹
中支總局勤務を命ず
聯絡局同 松本茂登治
聯絡局同 宇佐美猪之松
マニラ支社勤務を命ず(三月十三日附各通)
聯絡局勤務社員 柳 吉松
准社員 早津 三郎
平壤支局勤務を命ず(三月十六日附各通)
編輯局勤務社員 淺倉 泰
同 堀田 榮
金澤支局同 酒井 井平
神戶支局勤務 田淵 勝
經濟局勤務を命ず(三月十七日附各通)

南支總局勤務社員 菊江 榮一
中支總局勤務を命ず
中支總局同 川上 一男
南支總局勤務を命ず
下關支局勤務 福田 武雄
准社員
山口通信部駐在を命ず
大阪支社勤務社員 金井 義元
編輯局勤務を命ず(三月十七日附各通)
編輯局同 川井 弘彦
同 篠山 勇
滿洲國通信社勤務を命ず(三月十九日附各通)
長野支局同 多田貞三郎
聯絡局勤務を命ず
編輯局同 勝田 次郎
北支總局同 會田 匡
北支總局勤務 橋本彌榮子
准社員
編輯局勤務を命ず(三月二十日附各通)
滿洲國通信 木原 喜一
社員を命ず
聯絡局勤務を命ず(三月二十日附各通)
海外局勤務囑託 番野 直治
中支總局勤務を命ず(三月二十三日附)
總務局勤務 近藤 ひろ
准社員
海外局勤務を命ず
大阪支社勤務社員 野津 榮
同 藤田 令允
南方總局勤務を命ず(三月二十七日附各通)
大阪支社同 根本村一夫
編輯局勤務を命ず
青森支局同 桃井 幸吉
仙臺支局勤務を命ず(三月二十七日附各通)
海外局勤務囑託 住吉 計夫
北支總局勤務を命ず
中支總局勤務社員 三宅 敬
聯絡局勤務を命ず

臺北支社同 澤入 猛次
中支總局勤務を命ず(三月三十日附各通)
神戶支局同 東 英敏
南方總局勤務を命ず
岡山支局同 野津 康雄
編輯局勤務を命ず
北支總局同 服部 稔
中支總局勤務を命ず(三月三十一日附各通)
靜岡支局同 大林 秀
海外局勤務を命ず
海外局同 辻 正二
總務局勤務を命ず
中支總局勤務を命ず
中支總局同 鹽塚 俊三
同 吳村伊佐雄
海外局勤務を命ず
編輯局同 小關 順平
同 村川 武躬
大阪支社同 尾坂 忠康
名古屋支社同 勝尾 信一
南方總局勤務を命ず(四月一日附各通)
聯絡局同 西内 省作
京都支局勤務を命ず
京都支局同 丸山 喜作
金澤支局勤務を命ず(四月六日附各通)
神戶支局同 徳永 廉
大阪支社勤務を命ず
總務局同 岩村 繁雄
京城支社勤務を命ず(四月七日附各通)
海外局勤務 金川 義人
社員試用
總務局勤務を命ず(二月二十七日附)
編輯局同 三宅 勇蔵
同 徳江清太郎
同 費達 守一
同 秋武徳次郎
同 河上 遼
同 榎本 三郎
同 黒田 泰清
(以下次頁(續))

辭令 (前頁より續)

總務局 同 三浦 正教
 大阪支社 同 名古 清
 同 同 井上 美義
 關門支社 同 上田 博
 京城支社 同 嚴 太燮
 下關支社 同 打井竹四郎
 岡山支社 同 木津 睦夫
 青森支社 同 横岡莊之助
 北支社 同 龜井忠三郎
 昭南支社 同 上田 正義
 パレンバン支社 同 加藤 達夫
 社員を命ず (三月一日附各通)
 編輯局勤務准社員 富永 初美
 試用 谷口 忠之
 同 高橋 二子
 同 蛭田キミ子
 同 佐藤シゲ子
 大阪支社 同 池田 文子
 京都支社 同 吉原 邦枝
 准社員を命ず (三月一日附各通)
 編輯局勤務社員 妹尾 忠雄
 同 岡澤 孝晴
 同 奥澤 繁
 同 田崎 花馬
 同 大谷 弘
 同 村山 百三
 同 新盛 進一
 同 大南 定清
 同 巽 勝
 岡山支社 同 秋山 貞一
 社員を命ず (四月一日附各通)

編輯局 同 横山 義衛
 同 平山庫四郎
 同 内藤 良作
 同 佐藤 翠子
 同 左近允みよ子
 同 齋藤タマノ
 同 中野 繁
 同 石山 一夫
 准社員を命ず (四月一日附各通)
 試用 今村大平
 編輯局の事務を囑託す 渡邊 勇
 海外局の事務を囑託す 加藤 勘次
 育成會囑託 加藤 勘次
 聯絡局の事務を囑託す 三宅 三郎
 編輯局の事務を囑託す 徳田 穰
 總務局の事務を囑託す (三月十日附)
 木村 治作
 奈良支社の事務を囑託す (四月一日附)
 渡邊 秀次
 關門支社の事務を囑託す (四月二日附)
 關門支社勤務社員 的場 明
 同 佐々木明と改姓
 同 藤山マズ子
 同 牧野 博
 同 依願解職 (二月十五日附各通)
 編輯局勤務休職社員 千葉 秀雄
 職員規程第二十一條に依り解職 (二月十五日附)
 花蓮港支局勤務社員 陳 存福
 依願解職 (二月十九日附)
 山形支局勤務社員 須賀井清介
 大阪支社勤務准社員 河井 イネ
 依願解職 (二月二十六日附各通)
 天津支局勤務社員 古川 薫美
 依願解職 (二月二十七日附)
 大阪支社勤務休職 桑川 禮子
 准社員 依職期間満了に付退社 (二月二十七日附)

花蓮港支局勤務社員 前田 廣一
 同 大倉 旭
 同 依願解職 (二月二十八日附各通)
 同 中村 正也
 同 依願解職 (三月三日附)
 同 白仁田宗太
 同 依願解職 (三月六日附)
 同 高畑 金正
 同 近藤 春雄
 同 依願解職 (三月十日附各通)
 同 樽谷徳太郎
 同 祝原 和子
 同 依願解職 (三月十一日附各通)
 同 小野 隆雄
 同 松井 昌雄
 同 依願解職 (三月十二日附各通)
 同 中川 平雄
 同 依願解職 (三月十三日附)
 同 歸來シズ子
 同 依願解職 (三月十五日附各通)
 同 元木 俊夫
 同 依願解職 (三月十六日附)
 同 齋藤 保衛
 同 中村 章
 同 依願解職 (三月十七日附各通)
 同 古原 勝代
 同 依願解職 (三月十八日附)
 同 古賀 董一
 同 滿洲國通信社へ歸還のため解職 (三月十九日附)

依願解職 (三月二十七日附各通)
 同 龜谷 笑子
 同 依願解職 (三月三十一日附)
 同 黎 南
 同 依願解職 (三月十一日附)
 同 藤重 鐵一
 同 依願解職 (三月二十五日附)
 同 小原 良知
 同 依願解職 (三月二十四日)
 同 小原 光志
 同 死亡 (三月三日)
 同 利惠
 同 神戶支局勤務社員 越智 利惠
 同 死亡 (三月十四日)
 同 沖 篤
 同 死亡 (三月十七日)
 同 大峽 義雄
 同 死亡 (三月二十七日)

古川 貞市 編輯局
 寺崎 鐵夫 總務局
 日比野 良夫 南支社
 木村信太郎 南支社
 正木 和雄 (大阪支社) 長男
 豊田 治助 (同) 二男
 佐藤 二郎 (旭川支社) 長女
 岡本友三郎 (松山支社) 五男
 角田 常春 (經濟局) 二男
 高橋 武雄 (海外局) 二女
 高宮 利彌 (總務局) 次女
 郷田 亮巳 (昭南支社) 長男
 木田 正夫 (編輯局) 女兒
 小川 彰 (同) 同
 原 貢 (同) 長男
 丹山健二郎 (同) 同
 池田 純一 (同) 同
 福井 輝三 (聯絡局) 男兒
 小糸 忠吾 (海外局) 長女
 岡崎 一吉 (北支社) 女兒
 猪股 芳雄 (同) 同
 有馬 安夫 (同) 長男
 鈴木 又次 (聯絡局) 同
 △應召、入營
 西田 耕策 大分支社
 岩城美知雄 大阪支社
 仲丸 重毅 聯絡局
 永松 英男 中支社
 赤石 正吉 同
 安田 壽男 同
 立田 近 同
 安井 徹 編輯局
 行武了藏 同
 山田 昌一 北支社
 垣内 政彦 編輯局
 △見舞
 東村 種一 (大阪支社) 病氣
 一條 重一 (海外局) 同
 藤川 覺 (總務局) 同
 藤目 晃也 (福岡支社) 夫人病氣
 高橋 正則 (編輯局) 盜難
 三枝治市郎 (經濟局) 病氣
 本多 孝平 (中支社) 同
 浦岡偉太郎 (同) 遭難
 幡野 博一 (編輯局) 病氣
 近藤 淳一 (總務局) 同
 龜谷 笑子 (海外局) 同
 佐野 敏一 (編輯局) 同
 島本 賢一 (同) 同
 豊田 清 (同) 同

小林 修三 (同) 同
 佐藤八重子 (總務局) 病氣
 小笠原 進 (編輯局) 長女病氣
 馬島 勇 (同) 病氣
 後藤 丙午 (經濟局) 夫人病氣
 大屋久壽雄 (編輯局) 長男重傷
 會田 國子 (總務局) 病氣
 佐藤喜一郎 (編輯局) 二女病氣
 松本喜美子 (中支社) 同
 高田 實 (編輯局) 同
 小林 忠男 (同) 同
 高田 實 (編輯局) 同
 井關 實 (同) 長女病氣
 △弔慰
 龜井種治郎 (經濟局) 次男死亡
 野口 勇一 (編輯局) 實父同
 野井 年春 (中支社) 實母同
 郷田 亮巳 (西支社) 長男同
 荒田政次郎 (聯絡局) 死亡
 寺崎 鐵男 (編輯局) 實父死亡
 百井 信二 (仙臺支社) 戰病死亡
 伊藤 勝司 (總務局) 養妹死亡
 小貫 良知 (聯絡局) 死亡
 永井 眞雪 (中支社) 實父死亡
 高橋 定 (北支社) 二女死亡
 柳田 莊藏 (聯絡局) 實妹死亡
 △退社
 西 郡 英 十 總務局
 菱川 敏子 海外局
 村瀬 木 吉 編輯局
 諏訪 英一 聯絡局
 合計 (件数) 八四件
 (金額) 五、五四〇圓

常務理事に就任

松本 鷹嘴 兩局長
 松本海外局長ならびに鷹嘴聯絡局長は別項 (第二頁) 掲載のごとく去る三月二十二日の理事會において滿場一致常務理事に選任され四月十二日主務官廳の認可を得、登記手續を了した。

互助會報告



△結婚
 大西保太郎 大分支局
 木原健男 編輯局
 千田眞清 同

『海外版』發行の反響
 本社で取扱ふ海外電報は日々數萬語に達するが、これが翻譯されて新聞紙面に現れるものは甚だ僅少である。新聞用紙制限の折柄やむを得ぬことはいへ、一面決戦下の時局に鑑みこの現象は遺憾といはねばならぬ。本社はこの缺を補ふため『同盟通信海外版』を發行、四月十二日より一般購讀の求めに應じてゐるが、各方面より續々申込みあり、多大の反響を呼んでゐる。
 △料金 月額 二〇〇圓